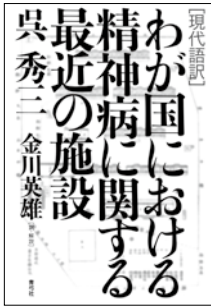


## ■ 書 評



【現代語訳】わが国における  
精神病に関する最近の施設

呉 秀三 著,  
金川英雄 訳・解説  
青弓社

2015年12月 416頁  
本体価格 3,000円＋税

「わが国における精神病に関する最近の施設」は「精神病患者私宅監置の実況」と同様に、呉秀三が細かい実務に長けた榎田五郎を女房役にして著したもので、明治期の精神医療の黎明とその歩みが詳細に記載された書である。従来は「わが国における精神病に関する最近の施設、附日本における精神病学の日乗」と題され、「わが国における精神病に関する最近の施設」は呉により書かれ、付帯する「日本における精神病学の日乗（日乗は日記・日録の意）」は榎田の手によるものであった。原本は漢文にも秀でた呉の格調高い日本語で書かれ、それゆえ出版当時ですら難解と目されたようである。そこで、私たちでも容易に読み進められるように、旧字体とカタカナが新字体とひらがなに改められ、適切に句読点と改行が加えられたものが「現代語訳 わが国における精神病に関する最近の施設」である。それに留まらず、本文中に現れる人名や様々な事項に逐一詳細な注釈が加えられており、分厚い本書の紙面の半分はこの注釈の記載である。呉の原本がたとえ現代語に置き換えられたとしても、これらの注釈なしには単に字面を追うことのみで終始してしまうであろう。極めて豊富な注釈により、ようやくおぼろげながら呉の時代の精神医療が目の前に姿を現してくるのであ

る。それでも、前後関係や全体像を把握するのは容易ではない。その際に役立つのが、「日本における精神病学の日乗」であり、歴史書の本文と年表の関係に相当するともいえる。

原本にはないが、現代語訳においては章立てがなされている。「第1章 わが国における精神病に関する最近の施設」では、精神病学の開講、公立精神科病院の設立、日本神経学会（現日本精神神経学会）の創立などに触れられ、「第2章 精神病学を教授研究する設備」では、東京帝国大学の精神病学教室とそれに続く大学や医学専門学校での精神病学講座の設置が書き綴られている。「第3章 精神病患者を収容または処置する設備」では、東京府巢鴨病院（現東京都立松沢病院）の設備、患者の特徴をはじめ、当時も多数を占めていた私立の精神科病院がその概説とともに列記され、「第4章 精神病患者の待遇と処置」では、保護室の構造や病院における看護の状況が、「第5章 明治初年以降の精神病に関する法律または命令の変遷」では、精神病患者監護法や刑法・民法的事項が述べられ、そして「第6章 日本における精神病学の日乗」は上述の通りである。

「わが国十何万の精神病患者はこの病を受けたるの不幸のほか、この国に生まれたるの不幸を重ぬるものというべし」と書かれた「精神病患者私宅監置の実況」と異なり、呉は本書においてあまり自身の考えや意見を交えず、淡々と事実を並べて史実の記録に徹している。本邦における精神医療の歴史像の解釈や歴史論の形成はまさに後進に委ねられている。今さらながら、しかし改めて「温故知新」の言葉が思い起こされる。現代の精神医療を担う者に一度は手に取ってほしい書である。

(根本隆洋)